

《資料》

閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進

—「Café ゆっくり生きる。」の試みから考える

崎原 秀樹・天羽 浩一・小杉 雅彦・村野 剛

閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進

—「Café ゆっくり生きる。」の試みから考える

企画者	崎原 秀樹	鹿児島国際大学
司会	天羽 浩一	共同社会福祉士事務所こすもす
話題提供	小杉 雅彦	特定非営利活動法人ヒューマンネットワーク
話題提供	村野 剛	特定非営利活動法人ヒューマンネットワーク
指定討論	崎原 秀樹	鹿児島国際大学

要旨：鹿児島県大隅地方鹿屋地区で閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進の場を設けて行ってきた試みについてシンポジウムを行った。企画者は、話題提供者らと共に「Café ゆっくり生きる。」というたまり場を作り、12の体験型講座（月2回）の運営にかかわってきた。人口減少が進み、公共交通網も少なく、社会資源が少ない地域の高齢者と何ができるか、「生きにくさ」のなかでの乗り合いバス、相手を認めるとは何か、今後はどのように進めていくかについて討論した。

Key Words：閉じこもり傾向の高齢者 生きにくさ たまり場 人口減少 マイノリティ

はじめに

天羽：おはようございます。今日は、シンポジストが鹿屋から来られるということで、台風のことを気になっていましたが、天気が悪いと船が動かないですから、良い天気になってほっとしました。私は、2年前まで崎原さんの同僚で、今は開業型の社会福祉士をしています。その関係で月数回、鹿屋方面を成年後見の仕事でまわっていますので、司会を仰せつかったと理解しています。あもうと申します。

それではまず始めに自由企画シンポジウムを立案された崎原さんから、「閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進—『Café ゆっくり生きる。』の試みから考える」の企画趣旨について説明を受けたいと思います。よろしくお願いします。

企画趣旨

崎原：小杉さんと村野さんのお二人が無事、大隅半島から錦江湾を渡って薩摩半島にある国際大学に、垂水フェリーで来られたので、粛々と進めたいと思います。

話題提供者の小杉は、鹿児島県大隅地区の拠点の一つである鹿屋バスセンター跡地近くで通信制高校である八洲学園大学国際高等学校のサポート校「スタディールーム」を開き、不登校の子どもたちのたまり場を作ってきた。併行して鹿児島県の事業としての引きこもり・ニート支援なども行ってきた。

数年前から崎原は、これらの実践に関わる機会を得た。社会臨床学会の動向に関心のあった小杉が、学会の

ホームページで、崎原の名前を見つけ直接職場に電話をかけてきた。今進めている事業について一度話をしたいと言われるので、その事業が行われている現場で話を聞きたいと答えたのがきっかけである。

今回の企画も最初は引きこもりの若者に対する内容で企画書を書いていると聞いた。途中から対象が変わったけれども、現実に対処の迫られている、生きにくい若者に対する取り組みも含めたかたちになった。

長年、大隅地区で暮らす小杉は、薩摩半島に比べ大隅半島をエリアとする大隅地区の現状を公的な交通網をはじめ、社会的資源が少ない。子どもたちに限らず、そのような社会的資源に関わらない／関われない人たちがいると分析し、ライフステージに渡って、閉じこもり傾向にある人たちのたまり場を作れないかと構想した。

それが大隅地区の中でも鹿屋地区の閉じこもり傾向の高齢者に対するCaféと、そこでの講座の開催という企画になった。この事業は平成25年度の独立行政法人福祉医療機構による社会福祉振興事業の中の地域連携活動支援事業の一つとして採択された。

今回はその半年間の実践を紹介するなかで、閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進について考える。小杉さんには試みの背景と事業活動から見えてきたことについて概括的に話題提供してもらい、村野さんには事業の中の公開講座、その他の運営に関わる中で見えてきたことを話題提供してもらう。指定討論者の崎原はCaféと公開講座を可能にした地域社会の特徴とそれに基づく今後の課題を含めて検討する討論の土俵を作りたい。あれこれと勝手なことを言いながら大隅地区、なかでも鹿屋地区で何ができるか考えてみたい。

天羽：ありがとうございます。それでは続いて小杉さんと村野さんからヒューマンネットワークの取り組みについてレポートしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

話題提供 「Café ゆっくり生きる。」の背景と方法、成果と課題 小杉雅彦

小杉：初めまして。ヒューマンネットワークというNPO法人を村野さんらといっしょにやっている小杉と申します。このオレンジ色の派手な建物なのですが、ここが僕たちの拠点です。今回の事業に入るまでとそれから入った後のことを話させていただきます。(パワーポイントの画面を操作しながら)

僕は元々京都出身で、今まで生きてきたうちの半分くらいが京都で、残りが鹿屋で生活をしています。個人的には、僕は鹿屋には地縁や血縁とかは一切ありません。僕のかみさんの実家が、鹿屋よりもさらに半島の先の方、大根占って言う地名—今は名前が変わりましたが—がありまして、お父さんが癌になったのが分かって、うちのかみさんが長女で、僕は勤め人ではなかったもので、動きやすいつてことでこちらの方に来たと。

ところが来てみたら、だんだんと町が小さくなっていくなかで、おじいちゃんとかおばあちゃんが一人暮らしの世帯ばかりになってきて。亡くなったお父さんは、田舎によくある何でも売っている雑貨屋さんをされていたんですけど、僕が行ったときには過疎化が進んで「ちょっと、これ無理じゃない？」って状況でやっていました。それで、お母さん、父方のお母さん、おばあちゃんもまだ生きておられたので、この後、どうするんだって話し合いになった。僕ら夫婦は、鹿屋市へ出てきて、実家の支援をしながら、僕らはちょっと大根占で生活するのは無理だよなって話になった。こういう地域は、人間関係が濃すぎる。良い面もあるのですが、全然違うところで育った僕にとっては、すごく生きづらい。

今回の企画の発端は、自分自身がそういう経験があるので、大隅半島、なかでも鹿屋地域には多分生きづらい人いるんじゃないかな、みたいな発想があるかもしれない。そういういきさつで鹿屋に来たので、それまでに何か知り合いがいたとか一切なくて。そこでいろいろしているうちに、いろんな人とつながって、去年あたりから、これが始まったわけです。

僕は、元々心理職です。この心理って言うやつは、そこだけに注目すると、何でもかんでも全部、自己責任になっちゃう。ではなくて、その人を取り巻く環境を、ちょっと変えてあげれば、その人の心理に直接当たらなくても、楽になることってあるんじゃないかな、というあたりから、この企画は始まっています。やろうとしたときに、僕自身が、確固たる何かを持っていたわけじゃなくて、たまたまこの助成事業を見つけて、助成

事業なら、いろんなことにチャレンジできるからやってみようということで、これを始めました。

どういう人たちを閉じこもり傾向の高齢者と定義するのか？ 実際にやってみてからわかったんですけども、非常に難しい。

僕は今回の事業をする前から、オレンジ色の建物と道を挟んだ反対側にある建物の1階で、いわゆる、通信制高校のサポート校をやっています。なんで始めたかって言ったら、心理相談をやっているとき、若い子が来て、この子らはちょっと環境を変えてあげたらなんとかなるんじゃないと考えるようになったから。例えば知的とか身体的な障害のあるかたが行く学校として、特別支援学校がある。ところが、昨今有名になっているんですけど、自閉症スペクトラムなどの発達障害の人たちは、特別支援学校にはそぐわない。他方で、一般的な全日制の学校とか、普通教育にもそぐわないっていうのが分かってきた。確固たるものがあってやったわけではないけれど、こういう子たちには通信制がすごく合ってるんじゃないかと。自分のプランでできますから。ただし、自分一人で、家でするといのはなかなか難しい。

例えば、中学校のとき、不登校だったので、通信制の高校に行きました。勉強もしてないから、一人でやりましようってというのは難しい。大人でも、ユーキャンとかの通信教育をやろうと思ったって「積ん読」になっている人はいっぱいいるわけで、一人で勉強を継続するのは大変。それをサポート校というかたちでサポートしてあげたら、わりかしスムーズに勉強が進みます。勉強内容も緩いんで中途退学する理由もないし、今のところ、みんな卒業しています。

そういう流れもあって、今回「ゆっくり生きる。」も始めたんですけど、若者の場合、引きこもりって言うんですけど、年を取ると、閉じこもりって言うらしい。前者の場合、将来を見据えてっていうことがあるんですけども、後者には将来がたくさんあるのかといえば、年齢的にそうはない。

例えば公務員なんかをされてきて、定年後、周囲には閉じこもっているように見えても、庭いじりなどしながら、自分のその環境の中だけで生きている人の場合、別に無理して社会参加させる必要はないんじゃないかと。その人がそれで満足しているならば、わざわざそこから出てくることにどういう意味があるのかというのを、実際やってみて感じました。

もう一つは、Caféを作って自由に出入りしても良いことにして、一般とはちょっと違う変わった人が興味を持ちそうな講座をするといっても、その閉じこもっている人が「ハイハイ、そうですか」なんて言って、ピューッと来るようなことはないかと…。利用者の数については、僕は全然満足してないので、これは時間がかかるなあとと思っています。

利用者の数を増やすためには、閉じこもりの定義自体が難しく、結構元気な人も来ているんです。元気な高齢者向けの事業は、行政でもいっぱいやっています。そういうところに行けない人たちが何もしないでいいから、ダランとしてられる場所を作ろうか、つまり何かしなければならぬというmust思考ではなしに来れる場所が必要じゃないかと、僕は考えていたので、あまり元気な人がいっぱい来るとですね、良貨が悪貨を駆逐する、悪貨ではないんですけど、趣旨とは違った方向に行ってしまう。元気な人が集まってくると余計、閉じこもりの人が来れなくなるから。

そのあたりはすごく難しいところではあるんですけど、半年間事業やってみて、かたちが変わってきています。現在は、自主事業として、閉じこもり傾向の人たちだけにとどまらず、生きづらさを感じている人たち、もしくは先ほどちょっと出ましたけれど発達障害を中心とした世間の価値観とはちょっと違う人たちの居場所づくり、家以外での居場所づくりとして続けています。

3月いっぱい事業が切れたので、次も応募して、継続したらいいんですけど、制約がいっぱいある。行政と一緒に、お年寄り若者は全然違う事業として位置付けている。年寄りでいくなら若寄りでいけと、若寄りでいくなら若寄りでいけと、いう話なんですけど、でも、僕らにしたら、そこをあんまり区切りたくない、みたいな話がある。だからいまは自主事業として続けています。

自主事業っていえば、言葉はカッコいいんですけど、どうやってスタッフや講師の金払うのという現実的問題にぶつかる。ということで、さっきの黄色い建物の2階の一部で障害者総合支援法による就労継続支援B型

事業所を6月から始めました。僕は身体とか、知的とか、発達とか、障害を種別に分けたりはしないけど、自立支援法が今、障害者総合支援法になっても、発達障害を含むという文言で精神障害の中に発達障害は入れられる。

1階では、これまでどおり、閉じこもり傾向の高齢者がきていて、そのCaféや講座を2階が運営するかたちにしたんです。だから1階はお金稼がなくていい。無料で近いかたちでみんなが寄れる場所づくりをしている。老若男女というか性別、年齢に制限なくやっぺこうというのが現状です。後は崎原さんや天羽さんからいろいろ質問していただくと聞いているので答えていきたい。ということで、講座の方の内容は、どんなことをしていたかというのを、実際に講師をしていただいた村野さんから説明していただきます。

話題提供 「健康生き生き体操」講座にかかわるなかで見えてきたことと課題 村野剛

村野：Café内の講座で生き生き健康体操を担当しました村野と申します。元々は医療職です。高齢者の閉じこもり傾向にある人は、閉じこもっているんで体力が落ちる。だから余計に閉じこもって身体機能が低下するところに着目しました。からだ作りに興味があるけど、閉じこもっている人の活動範囲を広げるアプローチをしようと思って取り組みました。

最初、体力チェックしてプログラムを進めて最終的に体力テストをやっぺどの程度回復したか、今後何をやっぺいくかというとき、どの程度向上したかも含めてモチベーションを高めてもらえるような話し合いをしながら、体力作りを続けてもらおう。

最初ウツウツとした表情の人でも体力作りをすると活動範囲がだんだんと広がっていく。すると自分に自信が持てるような感じといいますか表情がだんだん明るくなってきて活発になる。いわゆる生活不活発病的なものから脱却するケースがありました。

ただもともと閉じこもり傾向にあるので、あまり動きたくない傾向にある人たちです。メニューを加えていくと今日はもうお休みしたいですとかいう人もいました。他方で健康体操に興味を持っている人のなかにはどうにかしようという気持ちがあったので、そういう人たちは、庭いじりから、散歩に出たりとか外に出ていく人も、2、3人いらっしやいました。

実際のメニューは、転倒防止のための下半身とバランス感覚強化になります。運動テストの結果を鹿児島県が示した評価法に当てはめて実施しました。

運動をはじめたころは、やはり心肺機能も低いので、座位を中心とした足、膝関節の屈伸や体幹の運動、慣れてきたら立位を中心として、敏捷性や持久力を高めるために負荷をかける方法に変化させていきました。

結果、健康体操により、ADLや生活機能は明らかに向上し、元々機能低下が少ない項目ほど運動効果が顕著で、睡眠の質、社会的活動参加の意欲や高齢者特有の症候（起立性低血圧など）が改善傾向を示して居ると思われます。

講座の開始時、終了時に行った体力テストの数値を六角形のチャートしたものを比較すると、六角形に近いほど、バランスがとれているというのが分かります。高齢者の場合、六角形のバランスが悪い。特にバランス感覚が悪いので、下半身強化をすることから始める。この方の場合、体力的なところ、敏捷性とか柔軟性とかを改善していくと生活不活発病的なところから脱却する傾向が見られると、半年ぐらいやっぺ実感しました。活動的になってくると当然、社会参加しやすくなっぺくると思っぺいます。

行政とかも、居場所作りをずっとやっぺしているなかで、この事業では、英語とか、料理作りとかいろんなメニューをたくさん提示することによってその人が興味を持ったところで社会参加というよりも家から外に出てもらっぺいう。そういう居場所を、行政の網から洩れる人たちとともに、ゆるいかたちでやっぺいきたい。ただ居場所づくりだけではなく、軽い目的を提示して参加しやすいかたちを作っぺいけないのかなと思っぺいます。

ヒューマンネットワークというNPO法人とどのようにつながったか？ という僕は、小杉さんとはもともと

と鹿屋でのコミュニティー放送の番組作りで知り合ったんです。僕自身は、隣の垂水市に住んで仕事をしていて、ちょっとここでこんなのをやるからやらない？ みたいな感じに言われて、簡単に乗っちゃったんです。他にも今回は、福祉に興味のあるいろんな職業の人たち、織物をする人とか、栄養士さんとかいろんな人たちが参加されました。結局、田舎とはいえ、人材はあっちこちに散らばってるんです。それを上手くつなげていく人が今回は小杉さんだった。

福祉や高齢者問題とかをどうにかしたいなって思っている人たちをどうつなげていくかっていうところが今後、「Caféゆっくり生きる。」という事業をやっていく上で、また新たな課題になるのかな。スタッフなんかも、ここで実際にスタッフが講座のときにちょこっと参加したりしていて、普段高齢者と触れ合う機会のないような若いスタッフがなんですけども、1時間、2時間と触れ合いの時間が生まれている。そういうところの世代間交流というの、高齢者の人たちにはいいのかなって感じがしています。

天羽：どうもありがとうございました。それでは指定討論者になっている崎原さんのほうから、論点整理と問題提起をお願いしたいと思います。崎原さんよろしくお願いします。

指定討論 本シンポジウムを準備するなかでみえてきた論点

崎原秀樹

崎原：二人の話題提供を聞いていて、自然と、社会臨床雑誌22巻1号の巻頭言に自分が引用した文章につながりました。その雑誌を発行する学会の年次総会での加藤彰彦さん（ペンネーム・野本三吉）による記念講演を聞いた知り合いが触発されたことばです。

「文化はそこにあるものではなく、そこにいる人間と一緒に助け合いながらそこで育み守っていくものであり、そういうものがコミュニケーションや共同体である。そして文化は生活の中から生まれ生活の中で育まれていく、そう考えると、生活を綴る、つまり、生活をどういうふうにつなげていくか、を振り返ったりする活動は、次の生活につながる。そういう作業も文化を産み、育む活動である。」

このシンポジウムを行うための準備として、「Caféゆっくり生きる。」の事業活動報告書をもとにそれぞれ地域的に離れているので、メールとか電話でやりとりしてきました。天羽さんが、閉じこもり傾向の高齢者に対する取り組みを考えるためには、大隅地方の抱えている課題とそれに対する他の試みとの比較を通じて、話題提供を掘り下げる必要があるのではないかと指摘してくれました。

先ほど、小杉さんが、大隅地方に住むようになっての個人的な体験を話してくれましたが、そのような地域にどう関わろうとしているか、地域との信頼関係を取り結んでいくにあたってどのようなことを考えているか、生きにくいんだったらどう取り結んでいくのか、このあたりからの問いかけをもとにやりとりを始めたと思います。

天羽さん、よろしくお願いします。

大隅地区に行くようになってみえてきたこと

天羽：私は大隅方面に月3回ぐらい、成年後見の仕事で行っています。成年後見というのは、症状が重い認知症や障がいを持っている方で、親族のサポートがない方、そういった方の金銭管理や、生活支援をする仕事です。大隅に住んではいないので、大隅について内部的に詳しいわけではありません。非常に広い大隅地域を、道路を自動車で走っているなかで、外側からの風景と、このところ南日本新聞の記事に書かれていることが、なるほど重なるなと感じることが多いですね。新聞の記事と自分自身が外から見た目が、かなり合致した記事を紹介したいと思います。（OHCで南日本新聞の記事を映し出す）

これは、20代、30代の女性人口が30年後どうなってるかを日本創生会議が、新しく統計的に推測したデータです。衝撃的なものだったんですけど、大隅の4市5町というふうになるかという、一番減少率が高いと言われている南大隅町で70.2%、その他もほとんどが激減。一番減少率が低いと推測されている鹿屋市でも40%減少です。20代、30代の女性がいなくなるのですから、当然子どもが生まれなくなるので、人口激減は避けられない、「故郷消滅に危機感」という記事もあります。

行政は、30年くらい、少子高齢化社会に対する様々な対策を打っていると思うんですけど、ほとんど効果を収めていない。今後ともいろいろな施策が出されると思いますが、基本的な流れを変えることはできないと思います。そんななかでどうやって生きのびていくかっていうことなんですけど、その前に参考として後見活動で見たことを紹介します。後見を引き受けたら、まず被後見人のところを訪問するんですね。

病院とか施設に入所されている方が多いので、通帳とか重要な書類があるかどうか、そもそも住まいがどうなっているかを調べるために、家に行く。地域包括の方とか役所の方と一緒に行くんですが、玄関の戸を開けたとたん、ネズミか猫が荒らしたのか分かりませんが、ゴキブリとかもいますし、ぐちゃぐちゃになっていて、うちの中に入れるような状況じゃない。そういうふうなかたちで家が壊れていく。かつてはそこで野菜農家などをして一家団欒がある、いわば普通の暮らしをしていたはずなんです。それが高齢化して病院とか施設に入っていく、お子さんがいても別のところで生活しているから戻って来れない。家を処分するにしても、売ったり出来る価値があるわけがないので、朽ちていくしかない、そんな状況に出くわすことがあります。

これは6月29日、今日の記事です。「消えゆく墓地」、墓地すらも管理することが出来ないっていう、これは鹿児島全域の話です。人口減少のなかで生きのびていくのは非常に大変。それでも色々な地域で様々な取り組みをやって、それでも部分的なところでそれを盛り返していくことしか出来ないと思います。

いろんな意味で有名なものでは柳谷集落、通称「やんだん」での集落活性化があります。あそこは300人くらいの人口の中での集落全員での暮らし再生の物語です。非常に素晴らしい全国的にも有名な地域ですが、あくまでも点、ほんとにスポットで盛り返すことぐらいしか出来ないのかもしれない。

国際大の地域総合研究所の高橋所長が代表で、今年から南大隅町と連携して、観光とか福祉とか経済とか農業とか文化とか総合的なかたちで、南大隅町の活性化をテーマにして活動を始めたようです。

そういう様々な活動があるなかで、ヒューマンネットワークも鹿屋地区で活動されている。小杉さんたちのほうは、地域全体で盛り上がりたとしても、それには乗れない人もいるんじゃないか、そういう人たちを対象にする。それと単に乗れないお年寄りだけではなくて、社会適応がうまくいかず自立を阻まれている若者、いわば社会に乗れない若者を含めて、両方を結びつけていこう。そういう方々のたまり場を作っていこう、そういう思いが込められた意欲的な取り組みだと思うんです。

これらについて、小杉さんがヒューマンネットワークを立ち上げて、今回の事業を展開していく上で非常に社会的な意味で関心を持ったとされる、山口県周南市であった、集落皆殺しを謀った放火殺人事件と比べて話をしてもらいたいと考えています。小杉さんの場合、地域の外側から来た人間ですけど、周南市の事件はUターン。鹿児島に戻ってきた人たちが適応出来ない状態も当然あるわけで、地域のなかにある社会的な排外視の課題がどのように結びつけられるのかという課題があるだろうと思います。

また今後の活動をどういうふうにしていくか。助成が終了したので、就労継続支援B型で収入を確保するかたちになっていますね。今後の若者の自立支援を、いわゆるお年寄りの支援とどういうふうに関わりつけていくか、さっき述べられた内容をもう少し具体的に話してもらいたい。その際、村野さんあたりの活動と重ねていただきたい。

動物的な感覚をかたちにすることから「Café ゆっくり生きる。」は始まった

小杉：僕は動物的な感覚で生きているもんで、このシンポジウムにやるとことになったときも、この事業を始めるときもそうなんですけれど、ノープランで動いている。

何らかの原因があって、それは自らのものなのか環境なのか分からないけれど、このままでは、普通に社会の中でうまくやっていけないんじゃないかという経験をしている若い子たちが、最初は気になっていた。一般的な社会の基準で言えば、二次障害みたいなものが出てくるような子たちをなんとかしたいなという気持ちがあったんです。

誤解を恐れずに言えば、崎原先生にしても僕や村野さんにしても発達障害って言われるかも分からんくらいと言う意味で。天羽さんは、2回目でもよく分からないけど、風貌からして仲間じゃないかなと。心理職の人たちにそんな人が多い。臨床心理士などが、若い子たちの相談にのったりするんですけども、いやいや相談のっている場合じゃない、あなたが相談に行った方がいいよみたいな人がいっぱいいる。心理に興味を持つ人は、自分のこういう状態はどうなんだろうと思うところから入る人が結構いる。

そういうふうなことを何も考えずにお年寄りになった人たちのなかには、もしかして閉じこもっているんじゃないかなっていう人がいるかもしれない、というのが最初の感覚です。Caféをやるなかで、今から社会参加してがんばって、明るくなったところで三十年はないでしょう。余生を静かに過ごさせてくれよ、みたいな人もいるわけです。そこんところが非常に難しい。

今、Caféで児童養護施設出身の子を雇っているんです。何らかの事情があって高校を中退したら児童養護施設にも入れないんですかね。

天羽：そんなことはないんですけどね。

小杉：そんなことはないですか？

天羽：ないんですけど、居づらくなるっていう点もあるかもしれない。お互いに。

小杉：そういう子が一人居て、施設で担当していた人が「この子なんとかならないですかね」。みたいな話があって、いいですよ、スタッフで雇いますよ、と引き受けた。その子には、閉じこり傾向にある高齢者たちと出会うなかで、何か見いだしていつてくれないかなという希望があったりします。そんな気持ちだけで始めたんです。

崎原：居場所づくりをやる時、高齢者も若者もごっちゃにしてるのはすごくやりづらい。つまり、申請してもなかなか助成の対象にならない。今回の企画というのは高齢者をメインにしながら、若者が事業の中に絡ませていけば、今言われたみたいに接点ができて、何かが生まれるのではないかと。という思いつきで始めた、と。

結果として、Caféの利用者や講座の参加者はおよそ、どのぐらいの人数で推移していったんですか？ Caféはワンドリンクで300円で3時間居られる。講座は、12講座で月2回、1回600円で受講できる。最初は18くらいで始めて、1ヶ月前後の無料体験期間を設けて参加者の数や反応をみながら、最終的には12講座に絞り込んだんですよ。

小杉：Caféの利用者は一日10人とみていたんです。平均して1日10人も来なかったので予算的にもこの事業は、大赤字で、手出しもいっぱいしている。講座の方も、多いところは8～10人くらい、少ないところでは2～3人くらい、大体、4～5人くらいで推移したかな。

人だけ集めるのなら、最初言ったように元気な高齢者をターゲットにした方がいい。そうしたら辛づる式にいっぱい来るんです。それだと僕がやろうとしている趣旨と違う。ターゲットとしている人にそういうやりかたではなしに、ぜひあなたなんですよって、来て下さいよ、とうたっても、そういう人はあまり来ない。

実際は、目標の四分の一程度。申し訳なくて、次年度の事業の助成金申請しなかった。自主事業にしてくれないな。ただ、そういうふうな場所ってのがなかったんで来た人は喜んでくれています。長い間精神科へ入院してたんだけど、いまは元気でいられる人たちと話をすると、すごく勉強になる。一番印象に残っている言葉のなかに「足を知る」ってのがあります。ここに来て、こういう感覚が、自分の中に身体に入り込んでいたら、もう入院することはないだろうってその方はおっしゃっていました。

崎原：事業報告書や公開する事業活動報告書を一緒にまとめた者として、補足します。

閉じこもり傾向の高齢者にとってはただ単にコーヒーを飲みに来てね、って言われてもなかなか来にくい。

具体的な方法として少人数で行われて一般社会では多数となりにくい趣味や学習の場として講座をCafé内に設けた。成果と課題として、助成終了後も事業継続するためには経費がかかりすぎる問題があった。そのなかで、利用者と講師が一体となって講座を自主的にサークル化する動きが出てきた。場所を維持できれば、その人たちが、少しずつでも周りの人を巻き込んでいける。いわゆる積極的に来る人じゃない人に声がかげやすくなるし来やすくなるのかな。というのが事業活動報告書のまとめになるんです。

今後、Caféや講座という居場所はどのように続けられるのか？

小杉：天羽さんが質問されていた、今後の展開なんですけれど。

さっきのオレンジのビルの2階で、『企画室ポパイ』という名称で就労継続支援B型の事業所を始めました。出来るだけ制約を受けないようにということと、それからここでは、自閉症スペクトラム障害を中心とした人たちを受け入れていきたいので株式会社方式の法人でやり始めました。

障害者総合支援法ですから手帳を持っておられる方は簡単ですが、そういう発達障害とかいう方の場合、診断すら行ってないことが多い。つまり、なかなか仕事採用面接ですら行けないという方たちを対象としようとしているから、行政が受給者証を出すための基準ってのが必要となってくる。その基準をどうするんだっていうところで今、ワイワイ、あれがおかしい、これがいいんじゃないかと言いながらやっている。なんとかうまく折り合いが付きそうな感じで進んでいます。

Caféや講座の運営も徐々にそこへ移行させていっています。そこで働く人たちと、今まで来てくれていた閉じこもり傾向の高齢者の人たちが一緒になることによって、何か生まれるんじゃないかと思って、やっています。

村野さんの講座は村野さん自身が忙しくなったってことで活動休止になっています。講座を自主運営するためには講師謝金を払う必要があります。たった1人か、2人の受講生から毎回600円もらって、主催者が講師に何千円かを渡していたら、立ちゆかない。小学生でも出来る引き算をしたら、あなたのどこ赤字じゃないのかと。講師のかたから、それでは、私たちが心苦しいので、サークルとして受講生たちと一緒にやりますというような提案が出てきました。基本的に僕の周りには、みんないい人たちだから、勝手にそういうことを考えてくれるから、僕はごめんね、言っていたら、済むっていう感じで進んできました。

「Café ゆっくり生きる。」という場と、地域での人のつながり

崎原：閉じこもり傾向の高齢者についてはずいぶん具体的に分かってきました。小杉さんが鹿屋バスセンター跡地近く、元・美容室の建物を使って、Caféや講座を続けているなかで、地域ってのをどういうふう考えているのか？ 抽象的な意味での地域なのかもちょっと具体的な地域のイメージがあるのか？ っていうのが分かってくると、生きにくい人たちのつながりの場をどのように作ろうとしているのかが見えてくると思うんですけれど。

小杉：僕は京都出身で、今でも仕事で京都や大阪に行ったりするんですけど、電車が好きなんです。このCaféも電車の中みたいな場所にしかかった。みんながあちこちでなんかしゃべっているけれども、それは、どこかの一線で排除していたりもする。これは絶対駄目とか、いいよとか、そういうあらかじめみんなに共通する規則に沿って動いてるんじゃない、みんながそれぞれ考えながら自分なりにこれぐらいならいいだろう、という感じでやれる場所にしかかった。

バスセンター跡地近くにしたのは、残念ながら大隅地方は僕の好きな電車が走っていない。バスしかないから、みんなバスに乗ってほしいんじゃないと僕はそう思う。でもそんな人がいない。みんな、ほとんど自家用車でしか動かない、地域の活性化というのは、バスという交通手段をみんなが利用するようになったら、随分と活性化する。移動するときに人が見えてきますから。

僕は、引きこもっている高校生などに家庭教師をつけるのは駄目だと思っている。わざわざ家のなかに居やすい環境でできるので、ますます出なくてすむようになる。自家用車に乗せられて、学校に行き、帰りも自家用車で帰ってくるというのも、それと同じことだと思う。人の価値観に触れることはないから、すべてが自分の価値観で完結してしまう。自分では気持ちはいいかわからないけど、人とのつきあいが要らなくなってしまう。

だから、そういうふうな地域の中で人間関係をどう取り戻すのかわかっていたら、どうなんでしょうか？ 研究ではなくて、僕らに具体的に出来ることは、私、ここにいま一す、しかない。基本的に僕は、何が好きか嫌いかをはっきり分かるように、こういう人間ですってことしか言わない。その判断基準を僕は出来るだけ分かりやすいようにみせているだけ。講師の人とかスタッフの人は、みんな僕のことを好きなんじゃないかな、と僕は思っているんですけど、実際には聞いてないので分かんないんですけど、だから、好きだっていう人もいれば、嫌いだって人も多分いっぱいいる。僕はそれで全然構わないというか。嫌いって思っている人とは、僕はその人の関係がなくても構わない。勝手に嫌いって思っているだけですから、別に関係ない。好きっていう人とは関わるようになるから、お互いで考えていきましょうみたいな。それが少しずつ広まって、地域のなかでの人のつながりってできてくると僕は思うわけです。

崎原：結構、具体的なイメージのある、概念ですね。乗り合いバスのなかで、隣に全然知らない人がいても反対側の知っている人と話している。知らない隣の人は、また別の話ができる。そのなかで移動できる人が、手を挙げている小杉さんの隣に行ってみようか？ 行ってみたら、そこでやっていることに参加してみようという気になった。気が付くとそこには、他の人もいた、その人たちともつながっていきこうか、そこから何かが始まるみたいな、そういう場づくりなんでしょう。

私もどちらかというときびしがり屋のくせして、さっき小杉さんが言われた意味でのそこにすでにあるルールにしたがって、集団行動をするのは得意じゃない。この指止まれ！ 好きなやつ来て勝手にやっつけていいよ、しんどい距離になったら離れていいよ、近づきたくなったらまたどうぞ。そういう場所を作るには、助成金事業はすごくありがたい。最初のいろんな設備投資でお金がかかるから。動き出して目標の数値を達成しなかった場合、その場所を維持出来れば、自主運営になるけど、この指止まれ！ を続けられる。

そこで、村野さんには、小杉さんを一言で言うとどんな人か、どんな知り合いかなって言うのをお願いしたい。

村野：非常に難しい質問ですが、小杉さんは得体の知れない人です。いつの間にか引っ張り込まれている。この人は、いい意味で詐欺師的な、とにかく何となく協力したくなるキャラクターを持っている。ちょっとお願いとか、ごめんとか言われると気を許してついつい乗ってしまうというそういうキャラクターではないのかなと思います。

その周りにいる人が、この雰囲気ですべて生きていた人をどうサポートするのか？ というと、税理士さんとか、きちっとした人が周りについてサポートして、いわゆるヒューマンネットワークというものを構成している。福祉と言いつつ、福祉に全然タッチしてない人が、福祉をやろうとしている人に協力して、全体で福祉事業を展開していると言えるかもしれない。それがまた地域のある種のキーパーソンがつながって行って、大きなうねりになっていけば、この事業はもっと活発な活動が出来るのではないかと思います。

「Café ゆっくり生きる。」と周南市の事件

天羽：最後に一つだけ、小杉さんに質問。周南市事件とこの事業との関わりをどのように考えるのかを聞かせてください。この点が触れられていなかったの。気になっているところなので。

小杉：周南市の事件は、いろんな興味深い点があるので、これからいっぱい本とか出てくると思うんです。だから僕が思っていることが正しいかどうかは解らないんですけど。加害者の方にとって、あの事件がきっかけではなくて、地元に戻ってきてから、事件に至る日常生活そのものが彼を追い込んでいったんだと僕は思い

ます。周囲の彼に対する態度や付き合い方には悪意はなかったかも分からない。悪意がないから怖いんです。彼は、「郷に入れば郷に従え」という、その、郷に彼は入れなかった。入れない人を周囲の人たちはそういう人もいと認められなかったのではないか？

僕は、30歳少し前ぐらいで京都から鹿屋に来ているんです。言葉（方言）が変わりません、別に無理して言葉を維持しようとは思ってない。変われるもんなら変わってもいいんだけど変わらない。子どもの場合、その地域の言葉に変わることが多い。あれはその関係性の濃さが影響しているんじゃないかな、身体を預けて友達と一体となっていく。大人は一体となって、まではいかない。自分は自分でありつつ、相手と過ごす環境を作る。その辺のところから周南市の事件を見ていくと、僕たちのCaféとのつながりが見えてくるんじゃないかと。

周南市のあの事件の場合、やられた人だけではなく、加害者も被害者じゃないかなと僕は思うんです。ああゆうことをした人を被害者なんて言ったら怒る人いると思いますが、でも、僕はそんな気がする。加害者、被害者両方の心理を考えると、ある先生が言った、僕大好きな言葉があるんです。「私の常識はあなたの非常識と思って話をしなきゃいけない」。私の常識はあなたの非常識。この前、僕は、Caféの若いスタッフにそれを買ったら、あのね、私の常識はあなたの非常識というのは、それまんま、小杉さんのことですよって言い返されてしまった。

常識には範囲があるんです。例えば日本の常識が世界で通用するか、通用する地域もあるし、時間的には、時代的な制約も出てくる。僕の家には、醤油は二本ある。一本は「ちゃんとした」醤油。もう一つは甘い「こっち」の醤油。鹿児島の人には甘い醤油が標準でしょ、あれを醤油という、もう一つの方を辛口という。でも、日本全国レベルで言ったら少数派で、多数派は、辛口といわれている「ちゃんとした」醤油で、「こっち」のは味付け醤油なんです。それがそれぞれの文化であって、それはそれで両方ともそれでいいんじゃないかという話。それをどっちか一方が正しい醤油なんていうことにしたら、論争っていうかケンカが起きます。

生きていく上で自分が持っている価値観が、相手やその地域とは違う場合、どういうふうにしたらよいかといえ、やっぱり相手は相手として認める。多分、相手を認める為には、自分に自信を持ってなかったら相手をそのままの相手として認められないけど、つまり自分のなかでの絶対的な評価を、相対的な評価にして相手を認めるのは難しい。相手を認めることは決してそのことに対して私もそうしますと言っているわけではない、あなたはそういうふうを考えるし、行動するのねとただそれだけを認める話なんです。そういうことが出来ていたら、殺人まではいかなかったかなと思います。

おわりに—マイノリティの文化をどのように作るのか？

天羽:もう時間ですね。私の方の交通整理がうまくいなくて、実際のCaféや講座での活動報告ということと、地域そのものをどういうふうに捉え返すかという理念的なところが混線していて、分かりづらかったところがあってすみませんでした。

小杉さんたちヒューマンネットワークの取り組みは、地域で単に家に閉じこもっているというだけではなく、そこから疎外されているというふうに見える高齢者を対象にしている。併せて生きづらさを抱えている子どもたちも対象にしながら、両者をドッキングさせて事業を回していつている。明確なイメージはあるけど、非常に困難な取り組みで、今のところはとにかくそれを継続して行きたいということでした。でもどういうふうになれるのか自体がこれからの課題だと思うんですけど。

地域ということで考えると、大隅半島全域が、人口減少で地域が崩壊して主要集落がなくなっていくという危機的見通しのなかで、様々な団体が地域全体を活性化するかたちで取り組みを行っています。そのような取り組みのなかでも取り残されていく、そういう方々もいるという前提で言えば、マイノリティに対するアプローチになると思うんです。待っていれば、来てくれるというわけではない、アウトリーチしていてもそれにつながるというわけじゃない、非常に困難な実践だと思う。それを、小杉さんや村野さんたちは、鹿児島で言う

「てげてげ」っていう感じで、乗り切っていこうということじゃないかなと思います。

非常に雑ばくなまとめで申し訳ないんですが、これでこのシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。小杉さん、村野さん、報告ありがとうございます。皆さんからも拍手を。どうもありがとうございました。

資料

- 南日本新聞2014年5月9日「若い女性半減896自治体 2040年人口流出試算」
「故郷消滅に危機感」「地方の若年女性半減」
日本創生会議・人口減少問題検討分科会発表資料
2014年6月8日「空き家増自治体苦慮」
2014年6月29日「消えゆく墓地」「過疎高齢化 維持難しく」

日本創生会議・人口減少問題検討分科会は増田寛也氏を座長に2014年、総合的な少子高齢社会のありようをデータに基づきレポートし、大きなインパクトを与えた。

乗り合いバスという公共圏—シンポジウムの記録をまとめるなかで—

崎原 秀樹

今でも、小杉さんが何を考えているのかは分からない。それでいいと思っている。それでも、雲間に覗く太陽のように少し見えたと思える瞬間がある。2013年10月10日に鹿屋に行き、「アコースティックナイト」の公開録音を聞いたときがそれである。

小杉さんとの付き合いは、不登校や引きこもり傾向の青少年とのかかわりをしているので、意見をもらいたいという一本の電話から始まった。福祉医療機構の助成事業に申し込むから手伝ってというから、てっきり、青少年にかかわる企画で申請するのかなと思ったら、閉じこもり傾向の高齢者向けの企画「Café ゆっくり生きる。」だという。

FM垂水から流れているこの音楽番組で彼は、何回か「Café ゆっくり生きる。」について話している。この番組のディレクターが、Caféでは「健康生き生き体操」講座を担当した村野さんである。福祉医療機構への事業活動報告書には、この内容を資料として入れようと思った。そのなかで取り上げた山口の連続殺人放火事件について訊くと、必要があって書いたレポートだと言う。それも入れようと提案した。

「Café ゆっくり生きる。」という事業を進めながら、これまで彼が何を考えて鹿屋の地で生きてきて、そこで何を感じて、何をしようとしているのかが、見えた気がしたからである。小杉さんに対するこのような理解は妥当なのかどうか分からない。自分としては彼と付き合いやすくなったし、自分の仕事の方法に影響を与えられている。

公開録音の素起こしをもとに見出しをつけて読みやすく編集した内容と前述のレポートをもとに、小杉さんと事業活動報告書をまとめることにした。

山口県周南市連続殺人放火事件とCafé事業をつなげる着想が見えてきたからである。

「限界集落と言われる少子高齢化と人口減少が沸点に達したような環境のなか生活する者」は、他の地域に対して「多かれ少なかれ疎外感を持っている。持っているがそれを認めたくない、だからその疎外感は自からは表明しにくいもので表明すると、疎外されている者、さらには排除されている者と自ら認めてしまうことになる。それだけに、そのなかにいる者同士の連帯感を生むことにもなる。そしてそこに異文化を持ち込む者を排除することで、自分たちが疎外される者、排除される側ではないことを証明してみせるのである。」

疎外が入れ子構造のなかで再生産される。つまり、日本のなかで孤立した地域が疎外され、その地域のなかで孤立した帰郷者が事件を起こしたのではないかという仮説を立てる。不謹慎かもしれないと断り、今回の事件では、加害者も被害者ではないか？ と話す。

番組では、癌になり、引退もささやかれていた当時の吉田拓郎が、中島みゆき作詞作曲の「ファイト」を歌っているライブ映像が流されていた。

「Café ゆっくり生きる。」って場のそもそもの目的は、たった一人になったとしても、「ファイト」っていう、こういう曲があることによって、何か救われることがあるじゃないかなっていうことと、持て余している力を何とか違う方向に持っていけないかなって。」

今回、シンポジウム当日の記録をまとめてみて、小杉さんの着想と実践の一端を、天羽さんの切り込みを出発点にした「雑談」を通してある程度、浮き上がらせることができた。

プライバシーや個人情報保護の重苦しい空気がよどむなかで、公にした方がよいと思われることが隠され、公にしないと守られないことも隠蔽されていく。

いろんな状況のなかで、相対的に少数派あるいは孤立している者たちにとっての居場所というか、生きていきやすい環境をどのように作るか？ 市民革命後のヨーロッパのCaféや居酒屋でいろんな背景の人たちが、周囲に人がいるなかでしていた「雑談」を公共圏の始まりとする考え方がある。そのような場でいろんな出来事についていろんな考え方を交わすことや、周囲にいてそれらに耳をそばだてて聞くことから、いろんな営みのきっかけが生まれてきた。小杉さんの乗り合いバスのなかで何をするかのとえは、この延長にあると思う。

そのような公共性、公共圏を、前述の重苦しい空気がよどむなかでどのように作れるのが、いま、切実な課題の一つであることが、明確になってきた。

「Café ゆっくり生きる。」は、新たなかたちで自主事業に展開している。すでにかかわっている青少年に、新しい青少年もスタッフに加える組織を作って「Café ゆっくり生きる。」を続けている。そこまで、私は見通せなかったが、社会福祉の専門家が参加する学会のシンポジウムで、「Café ゆっくり生きる。一閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進」としてその成果と課題を討論する。記録も文章化し、事業活動報告書と共に閲覧できるようにしようというアイデアは、「アコースティックナイト」の公開録音直後に、小杉さんに提案している。

微力だが、企画を進める言葉と、活動を血の通ったかたちでつなげる試みを進めていきたいと思っている。

註

本稿は、2014年6月29日に鹿児島国際大学で開催された、日本社会福祉学会九州部会第55回大会内での自由企画シンポジウムの素起こしを編集したものである。ラグーナ出版編集部が素起こした内容を、崎原が見出しをつけて編集した。そのうえで、小杉、村野、天羽には必要な加筆削除を行ってもらい、校閲を得た。

なお、本シンポジウムは、鹿児島国際大学福祉社会学部児童相談センターと、特定非営利法人ヒューマンネットワークとの共同企画である。

本シンポジウムの素材になった、「Café ゆっくり生きる。一閉じこもり傾向の高齢者の社会参加促進」は、平成25年度の独立行政法人福祉医療機構による社会福祉振興事業の中の地域連携活動支援事業の一つである。事業活動報告書は、特定非営利法人ヒューマンネットワークのHPからダウンロードできるので、本稿と併読をすることをお勧めしたい。

最後に、日本社会福祉学会九州部会第55回大会内での自由企画シンポジウムとして、快く採用して下さった、本学の佐藤直明先生、田畑洋一先生に感謝します。

Thinking from the experiment of Café Living Slow — a promotion of social participations of elders who tend to shut themselves out —

Hideki Sakihara Kouichi Amou Masahiko Kosugi Takeshi Murano

We held symposiums on our experiment of creating a place that promotes social participations of elders, who tend to shut themselves out, in Kanoya-jiaku of Osumi area in Kagoshima prefecture. The planner has created a hangout, Café Living Slow, together with the topic providers, and has been engaged in managing 12 hands-on workshops. We discussed what we can do with the elders in a communities with the population erosion, little public transportation available, scarce social resources, a community bus system in difficulty of living, what is to accept others, and how we go from here.

Key Words: elders who tend to shut themselves out, difficulty of living, a hangout, population decline, minority